



インタビュー・文 高橋 誠

## 『エコノミストたちの栄光と挫折』

(東洋経済新報社・2100円)



竹内宏さんは、「パチンコ商法の秘密」など、経済を庶民の視点から論じた『路地裏の経済学』シリーズで有名である。本書のサブタイトルには、「路地裏の経済学 最終章」とある。シヨックを受ける愛読者も多いだろうが、

「機会があれば書きますよ」。

本書は、戦後日本経済の歩みをたどる。経済の本なのに、数式も表も一つも出てこない。

「73年のオイルシヨックを考えると、僕は場面が浮かんでくる。あの時あの会社は慌てたな、誰々さんはこう言ってたな、飯田(経夫)さんは、金森(久雄)さんは……と場面が出てくる。理論より先に人が出てくる」

こうして本書は、生身の人間が経済を作り経済を論じる、ヴィヴィッドな戦後史となった。そこには、竹内さ

## 他の評論家をけなさないことで私は批判されるんです

### 竹内 宏さん



たけうち・ひろし 1930年、静岡県生まれ。東京大学経済学部卒業後、1954年、日本長期信用銀行入社。同行専務取締役・調査部長、長銀総合研究所理事長などを経て、98年、独立して、竹内経済工房を主宰。現在は静岡総合研究機構理事長、静岡新聞論説委員、価値総合研究所特別顧問としても活躍中。著書は、『柔構造の日本経済』『路地裏の経済学』『国際版路地裏の経済学』『各県別路地裏の経済学』(全6冊)、『金融敗戦』『長銀はなぜ敗れたか』『とけぬき地蔵商店街の経済学』など合わせて多数。

ん自身も登場する。

「自分が生きた周辺を書いた」

竹内さんは、1954年、日本長期信用銀行に入行する。長銀ができて2年目だった。金融債を発行して企業に設備資金を供給する銀行としては、明治時代に設立された日本興業銀行があった。

「1行だけでは独占になるので、急ぎよ長銀もできた。その頃、長銀なんて誰も知らない。成績の悪いのがみんな入る(笑)」

マルクス派、供給重視派……

時代に合わせて宗旨替えを

竹内さんは調査部に所属する。他行では調査部所属はローテーションだが、長銀ではメンバーは「塩漬け」にされた。それは竹内さんが望んだことでもあった。塩漬けメンバーから、竹内さんの他に日下公人氏などそうそうたるエコノミストが育っていく。

65年不況のとき、政府は戦後初めて国債を発行する。長銀の役割の終わりの始まりだった。

「長銀は金融債を発行して都市銀行に買ってもらい、都市銀行はこれを担保にして日銀から金を借りて、企業に融資していた。ところが、政府が国債を発行して、政府が金をばらまく。日銀、政府、民間と金が流れて、長銀はいらなくなった」

そこで、長銀は、融資先の一つとして海外に注目する。竹内さんはアジアやアラブに調査に赴くようになった。以前から、原子力やコンピュータ



撮影・吉川 努

1の調査で欧米を視察していた。

「外国に行きたいから先端産業をやった(笑)。日本に高速道路がない時代で、アメリカの高速道路をすげえなと思って見ていた。ヨーロッパの街はきれいだし、とても追いつけるとは思わなかった」

しかし、日本は70年代のオイルショックを省エネ技術の開発で乗り越え、87年には1人当たりGNPが世界1位となる。終身雇用を保障する日本の経営や、相手企業が潰れそうになっても援助するメインバンク制が目された。しかし、バブルがはじけると

評価は一変する。

「メインバンク制はバカだ、債権を売り飛ばせばよかったと。数年前の金融学者の論文を読んでもみると、これからの時代はファンドだ、債権の商品化こそ素晴らしい、と。しかし、それをやった結果、今、アメリカは大不況ですよ」

経済学には、マルクス派、ケインズ派、供給重視派と流行があった。経済予測を仕事とするエコノミストは、時代に合わせて宗旨替えをしてきた。竹内さんもそうだった。現在は制度改革派として、地方分権の必要

性を考えているという。

「私の本で批判されるのは、他人をけなしていないこと。評論家は他人を批判しなければいけない、と(笑)」  
それは竹内さんの人徳であり器量だろう。調査部のトップとして多くの女性エコノミストを育ててきた竹内さんは、いま故郷の静岡市の「次郎長翁を知る会」の会長でもある。竹内さんには、清水次郎長の面影が残っているのかもしれない。

